

平成25年度第1回FD研修会議事録

日 時:平成 25 年 8 月 19 日(月) 14 時 00 分～17 時 00 分

場 所:講義棟25番講義室

スケジュール

司会:小池教授

14:00～14:10

学長挨拶「畜大型グローバル人材育成と平成26年度新カリキュラム」

14:10～14:40

基調講演「平成26年度新カリキュラムについて」 金山理事

14:40～

全体討議

テーマ「平成26年度新カリキュラムについて」

司会:小池教授

書記:押田教授、加藤教授

【理事の説明に対する質問】

Q1) ユニットポリシーに関するパワーポイント中の以下の点はミスではないか？(前田先生)

農業環境工学ユニット:「約役(誤)」→「活躍(正)」

食品科学ユニット:「目出(誤)」→「まで(正)」

Q2) 国際プログラムの海外実習開講期はいつなのか？海外実習履修の前提となる科目単位を2年までに全部履修出来るのか？(前田先生)

A) 履修可能な形でプログラムを考えている。

Q3) 今回の教育改変は共同獣医学ユニットの教育カリキュラムとどこまで関連するのか？(宮原先生)

A) 獣医の基礎学術ゼミなどには一切触れていないので、共同獣医学ユニットには変化はない。

Q4) 以下は科目名間違いではないか？(河野先生)

「国際開発論(誤)」→「国際開発協力論(正)」

【全体討論】

Q1) ユニット名の記述順番には何か意味があるのか？あるとしたらどのような理由か？(佐藤先生)

A) 現状では特に意味は無い。(室長)

A) 研究部門および分野の記載順等と統一させて並べる事は可能である。今後の検討課題としたい。(理事)

Q2) 教育プログラムがユニットであるならば、学生がユニットに所属(分属)という表記はおかしいのではないか？別の言葉に置き換える必要があるのではないだろうか？(澤田先生)

A) 今後表現については十分注意して修正をしたい。(理事)

Q3) 「畜産衛生学研究部門...判断して部門分野を兼務する」という表現があるが、判断は誰がするのか？(川島先生)

A) 当該教員の意向を聞いた上で、最終的には大学教育センターが決定する。(理事)

- Q4) 畜産衛生学研究部門の教員はユニット学部教育をしなくてもよいのだろうか？(小池先生)
- A) 畜産衛生学研究部門以外の部門・分野に兼任配置をする形にして、学部教育を担当する事になる。(理事)
- Q5) 畜産衛生学ユニットの立ち上げは可能だろうか？本学が掲げる学際領域(食の安全)の総本山として分かり易いと思うがどうだろうか？(福島先生)
- A) これについては考えていない。学部教育は6つのユニットで十分である。(理事)
- A) 設立当時、畜産衛生学大学院は博士課程構想だった(獣医畜産融合の新しい大学院を作る事を目的として畜産衛生学専攻が作られた)。しかしながら、大学院だけではなく学部も担当する教員がこれからは必要である。そして、畜産衛生専攻だけが食の安全を担当するのではなく、全学の教員で担当するという形が望ましい。(学長)
- Q6) ユニットの定員については担当予定の教員数で計算をするのか？(渡邊先生)
- A) 原則そのような流れになる。今後人数を検討する。(理事)
- Q7) 国際教育プログラムの科目を全部履修すると、共通科目で履修出来る他ユニット等の単位数がかなり限られてしまう。卒業要件単位に含めた方がよいかどうか？(福島先生)
- A) 国際教育プログラムについても卒業要件単位に含める。食品科学ユニットの場合、124 単位より多く科目を履修してもらうことになる。(理事)
- Q8) 資格科目の履修に際してキャップ制との関係は変わるのか？(古村先生)
- A) 従来通りキャップ制に含まれないものは含まない。(室長)
- Q9) 2学期制と4学期制の在り方については議論したのか？科目によっては4学期制で履修した方がよい場合もあるのでは？(古村先生)
- A) 講義の期日・期間については今後の検討課題である。他にも、例えば月曜日の開講数が少ない等の問題があり、曜日の振替等の配慮も必要である(室長)。
- Q10) これまで畜産衛生学の大学院組織を作ってきた側としては、これまでの流れを後退させないで欲しい。これまでの大学院を継承し、発展させていく方向を考えたい。今後、議論の必要があると思う。(浦島先生)
- A) 食の安全は大切であり、そのために出来上がったのが畜産衛生学専攻である。しかし、食の安全を単一の組織で教育することは難しい。学部レベルでの幅広い教育から、真の食の安全を担う人材が育成されると思う。この観点から考えると、今回の改変は後退ではなく食の安全を全学で担うための発展である。(学長)
- Q11) 履修モデルの出口を学生に示す必要がある。「標準」や「国際」というモデルの示し方でよいのであろうか？(仙北谷先生)
- A) 基本的に各ユニットで出口の事をよく理解して出口を提示して頂きたい(理事)。
- Q12) 全学の学生が国際プログラムを履修出来ると云う最初のコンセプトが、ディプロマの導入によって矛盾してしまった。全部を履修しなくてもよい様な国際プログラムの履修方法を提示してはどうだろうか？(前田先生)
- A) どのユニットを選んでも、国際教育プログラム科目を履修することができる。(理事)
- A) より広く受け入れたいと思うが、最終的なディプロマには成績等を含めて制限をかける事になる。(小疇先生)

Q13) 国際教育プログラムに制限をかけるのであれば、来年入学の学生達にきちんと通達する事が肝要である。成績に基づいてディプロマ規制を実施する事等を説明してはどうだろうか？(渡邊先生)

A) これについては説明をする事になる。(室長)

Q14) 授業評価とシラバスについて尋ねたい。授業評価の意義の周知徹底とは何か？来春のシラバス体裁についてであるが、この具体的な案はあるのか？(前田先生)

A) 授業評価の意義とは、授業評価の結果に基づいて、教員が授業の改善をする事が出来、そして、新たに授業を組み立てる際の資料としてもこれを活用出来るという点である。具体的には様々な方法があると思われるので、意見を頂きたい。また、シラバスについても内容(体裁)を提案したい。これについても意見を頂きたい。(理事)

Q15) シラバスについては、アクティブラーニング等の方法論は図書館の方策等でも提案されている。(前田先生)

A) 支援室の方でも幾つかの案を検討中である。(室長)

Q16) 学生の授業評価についてであるが、成績が上位の学生か下位の学生かで評価が違う。対応するためには、授業の方法も夫々で考えないといけない。この点を配慮するために、学籍番号等を書かせて、意見を書いている学生の成績を把握する事は出来ないだろうか？勿論教員は個人を特定出来なくてよい。意見者とその大凡の成績が分かればよい。(古村先生)

A) 記入、無記名で結果が変わるかもしれない点が懸念されるが、事務処理としては可能である。(学務課長)。

A) 出来れば書かせたいが、名前を書く事には学生の抵抗があるかもしれない。(理事)

Q17) 授業評価に際して、学生による自己評価は出来ないか？学生自身がどのような姿勢で授業に臨んだかに関する項目(予習・復習等?)をアンケートに含めてはどうだろうか？(ロメロ先生)

A) 学生が自身の修学態度を記入する欄も将来準備してよいだろう。(理事)

Q18) 国際教育プログラムの科目は選択必修なのか？(福島先生)

A) この点については履修モデルを含めて現実的に決定して行きたい。(理事)

Q19) これからの作業の流れを知りたい。8/21までに科目責任者、科目名を確認し、9/3の学部教育部会議に全て提示する事が出来るのか？(三浦先生)

A) 科目と科目責任者のみは最低限必要な情報である。(室長)

Q20) ユニット間で展開教育の科目数の差が大きい事が気になる。ユニットの紹介については、新設予定のキャリア教育で行うのか？(三浦先生)

A) キャリア教育で、将来の就職と繋げたユニット選択に関する説明をする予定である。(室長)

Q21) 2年生でユニット変更という選択肢はあるのか？(三浦先生)

A) ユニット分属については今と変わらない。2年の前期は仮分属にしてあるが、状況に応じて検討可能としたい。(室長)

Q22) 卒業研究で分属した教員の変更は出来るのか？(三浦先生)

A) 状況に応じて対処出来る様に考えている。グループ指導を行う他の教員への変更等は出来る様に考えたい。(室長)

- Q23) 1年次のクラス担任は、前期の農畜産実習のみ参加する事になるのか？(ロメロ先生)
A) 後期の新設科目キャリア教育でもクラス担任が大きな役割を担う事になる。(室長)
- Q24) ポートフォリオが提示されたが、基盤教育単位の取りこぼしでゼミに出る事が出来ない学生もあり、前年度以前の履修状況が問題となっている。進級について留め置き措置が出来ないだろうか？(木田先生)
A) 留め置き措置は今の所考えていない。今後の課題である。(室長)
- Q25) 特に農業高校推薦卒の学生では英語力が弱く、指導が困難である。この様な学生にどの様に必修単位を取らせるのが問題である。基盤教育の英語に留め置きのハードルを設けてはどうだろうか？(木田先生)
A) データから見た限り、農業高校出身学生が全て悪いというわけではなく、全体的に一定数悪い学生がいる(前田先生)。
A) 英語の取りこぼしが無い様に検討する必要がある。問題の先送り(英語が履修出来ない状況で進級する事等)をしない様にポートフォリオを活用出来る様にしたい。(理事)
- Q26) 新設科目のキャリア教育は卒業要件単位内に含まれるのか？この様な科目は評価が難しいと思われる。(島田先生)
A) 基盤教育の必修科目であり、卒業要件単位で通常評価を行う。(室長)
- Q27) 卒業研究のグループ指導は、必ずしなければいけないのか？(口田先生)
A) 大講座制の中でのよりよい教育を考えるためにグループ指導を提案した。基本的にはグループ指導を実施する事を提案したいが、他に意見があれば聞きたい。(理事)
- Q28) 誰(ユニット長?)がグループを作るのか？教員各自が自主的にグループを作る事が出来るかどうか分からない。グループを決める主体を決めて欲しい。(口田先生)
A) 教員やユニットで自主的に決めて頂きたいが、決められない場合、こちらから提案する事で抵抗がなければ提案するようにしたい。(理事)
- Q29) グループは同じユニットの教員なのか？グループはいつ頃までに決定することになるのか？(口田先生)
A) 原則ユニット内の教員で、年度内には決めたい。(理事)
- Q30) 誰とも組みたくない？という調整不能の問題が出て来たらどうするのか？
研究分野は同じでも特定の相手と組みたくない場合もどうするのか？(浦島先生)
A) 状況に応じた検討が必要である。(理事)
- Q31) グループ教員は必ずゼミも一緒にやらなければならないのか？(佐藤先生)
A) グループの具体的な有り様については今後の検討課題である。(理事)
- Q32) 授業評価であるが、学生は「またか」といううんざりした感じを持っている。全部の科目のアンケートは学生達にとって逆に負担であると思うがどうだろうか？(前田先生)
* Q32 は意見的な問い掛けであったため、A はなし。
- Q33) 授業評価に基づいて学期の途中で授業計画を大きく変えるのは難しい。次年度の学生に対して変更したものを適用するしかないのでは？(福島先生)
A) 黒板の字が小さい等の簡単な要望について対症療法的に改善する事は可能である。(理事)
A) 確かに学期途中で抜本的に授業を変更する事は難しいかもしれない。無理のない対応で

よいと思う。(学長)

Q34) 教員分属に際して、ユニットのしぼりはどの程度強くするのか？(橋本先生)

A) 学生は原則選択したユニットの教員に分属する。ユニットにおける卒業研究のしぼりは強くなる。(理事)

Q35) ユニットのしぼりが強くなるという事は、畜大型グローバル教育とは矛盾するのではないか？(橋本先生)

A) グローバル教育には共通教育科目の選択幅を広げる事で十分対応しているので、矛盾はしない。(室長)。

A) グローバルではあっても、専門の部分はきっちりと固める様にしないとイケないだろう。これは卒業研究の大原則である。(理事)

Q36) 分属の際に、学生はグループを選ぶのか？教員を選ぶのか？(橋本先生)

A) これまで通り教員を選ぶことを考えているが、どのような形がよいのか今後混乱がない様に検討して行きたい。(理事)

平成26年度カリキュラムについて

理事・副学長
金山紀久



平成26年度新カリキュラム案の骨子

1. 学部教育の出口を想定した実践的な履修モデルの設定
2. 「農場から食卓まで」に対応した広い視野と知識の陶冶のための共通教育の充実
3. 食の安全の理解を深める教育の充実
4. 国際教育を全学的に履修できるシステムの構築

ディプロマ・ポリシー

これからの社会において、「食を支えくらしを守る」人材として相応しい能力を身につけた学生にディプロマを授ける。

- ① 社会を支える豊かな教養を身につける。
- ② 専門知識、技能を学ぶための科学的基礎知識、技能を身につける。
- ③ 「農場から食卓」までを俯瞰できる専門知識と技能を身につける(学際)。
- ④ 食を支えくらしを守るための実学に基づく専門知識と技能、実践的応用能力を身につける(実学)。
- ⑤ 基本的コミュニケーション能力と国際的視野で物事を捉える能力を身につける(国際)。

ユニットの役割

- ユニット
 - 本学の学部教育課程において、DP、CPに基づいて専門教育を学ぶために学生が修得する専門教育の基本となるプログラムである。
- 設置ユニット
 - 本学の専門教育プログラムとして次の7つのユニットを設置する。
 - 共同獣医学ユニット
 - 家畜生産科学ユニット
 - 植物生産科学ユニット
 - 農業環境工学ユニット
 - 環境生態学ユニット
 - 食品科学ユニット
 - 農業経済学ユニット
- ユニットの学生定員は、これまでの実績と卒業研究指導の教員数を考慮して決める。
- ユニットの運営
 - ユニットのプログラム運営の責任者としてユニット長を配置する。また、ユニット長を補佐するため、副ユニット長を配置する。
 - ユニットの教育プログラムを運営するのは、ユニットと関係する部門分野の教員とする。畜産衛生学研究部門の教員は教員の専門分野から判断して部門分野を兼務する。
 - ユニット所属学生の履修指導、学生支援
 - ユニットが主として関わる専門教育科目の管理
 - その他ユニットの運営に関すること

新ユニットのポリシー

• 家畜生産科学ユニット

牛や馬など家畜の飼養管理、繁殖や改良、乳肉の生産・利用について、分子から生体までの知識を習得するとともに、実習を通じて実践的技術を学ぶことで生命科学分野から畜産現場まで幅広く活躍できる人材を育成します。

• 植物生産科学ユニット

日本の食料基地である北海道・十勝の立地条件を活かし、作物生産を支える土壌と病害虫を含めた栽培環境から、その環境で育つ作物の生理、生態、育種までを総合的に理解できる人材を育成します。

• 農業環境工学ユニット

農業農村工学や農業システム工学を主とする理論に基づき、先進的農業と環境保全を両立させるために必要な技術体系を学び、農業の基盤づくりや高度な農業機械分野で約訳できる人材を育成します。

• 環境生態学ユニット

多様な生物群(哺乳類、鳥類、昆虫、植物、微生物など)を含む生態系の仕組みを学び、農畜産環境とそれを取り巻く自然環境の関係を理解し、環境の保全と管理を考えながら、持続可能な農畜産業とこれからの生命科学分野で活躍できる人材を育成します。

• 食品科学ユニット

食品の一次機能(栄養とエネルギー)についての教育を基礎に、食品の二次機能(おいしさや食感)を学ぶ加工・利用学分野、三次機能(生態調節や健康)を学ぶ機能科学分野を総合的に理解し、農畜産物を素材とした食品製造から研究・開発目出を担う人材を育成します。

• 農業経済学ユニット

農畜産物の生産から加工・流通・消費に至る過程を、経済学を中心とする社会科学的なもの見かたや知識から総合的に把握し、地域や世界の農業・フードシステムが抱える課題に対応できる人材を育成します。

カリキュラム・ポリシー

ディプロマ・ポリシーに掲げた能力を身につけた人材を育成するため以下のカリキュラム・ポリシーのもとカリキュラムを構築した。
(今後、最終的に内容を詰めていく)

<カリキュラム・ポリシー>

- ① 基盤教育: 教養教育
- ② 共通基礎科目
- ③ 共通発展科目
- ④ 展開科目
- ⑤ コミュニケーション科目、国際教育プログラム
(国際教育プログラムの選択必修の導入)

カリキュラムの科目区分

- 基盤教育科目(学ぶ基盤、生きる基盤、共通基盤)
 - 基盤教育主任が管理責任を負う科目
 - 修得単位数の変更
 - 43単位→41単位に変更(「基礎学術ゼミナール」を廃止)
- 共通教育科目
 - 共通教育基礎科目
 - 共通教育科目の内、共通教育主任が管理責任を負う科目
 - 共通教育発展科目
 - 共通教育科目の内、ユニット長が管理責任を負う科目
 - 共通教育国際教育科目
 - 国際教育プログラム科目
- 展開教育科目:
 - ユニット長が責任を負う展開科目
- 教職に関する科目
 - 教員免許取得に関する科目
- 資格認定(博物館等)に関する科目
 - 学芸員任用資格に関する科目

カリキュラム改編の特徴的な事項

1. 全ユニットの学生が履修できる国際教育プログラムを設定した。
2. 「農場から食卓」まで農畜産学の基礎を学ぶ必修科目「農畜産科学概論」の6単位(畜産学、生態学、農学、食品科学、農業環境工学、農業経済学)を新設した。
3. 「全学農畜産実習」の教育成果を高めるため、新設する「農畜産科学概論」の座学講義と実習とを連動させた。(今後、さらに実習の充実を図る。)
4. 食の安全性に関わる教育を充実した。
 - 「食の安全学概論」の新設するとともに、食の安全性に係る科目にISO22000の理解を促す内容を加える。
5. 旧カリキュラムのいくつかの展開科目を共通教育科目へ移行することによって、多様な進路に応じた幅広い履修を可能にした。
 - 履修指導の充実が必要。
6. キャリア教育科目を充実した。
 - 「キャリア教育Ⅰ」と「キャリア教育Ⅱ」を新設し、学生が自らのキャリアを考え、本学で学ぶ教育プログラムを選択し、学生が納得した進路決定を行える能力を培う。キャリアを考えるための情報の提供が重要。
7. 卒業研究の指導教員の決定について、本学の特徴であるアドバンス制の考え方を明確化する形に改編した。ただし、学際的領域の研究課題に対する指導についても考慮した。
8. 全学の授業内容について見直しを行い、専門知識・技術の一方的な教授だけではなく、学士力を身につけることができるような授業内容を工夫する。

履修モデルの例(植物生産科学ユニット:標準)

＜展開教育科目＞(16)

土壌環境科学(2)、植物病虫害防除学(2)、植物ゲノム育種学(2)、
植物生産実習Ⅰ、Ⅱ(4)
卒業研究ゼミナールⅠ～Ⅳ(4)
卒業研究(2)

＜共通教育発展科目＞(26)

食用作物学(2)、植物生産土壌学(2)、植物生産学(2)、園芸
作物学(2)、草地学(2)、植物育種学(2)、植物病理学(2)、サ
ステナブル農畜産科学(2)、植物生理学(2)、環境保全農学(2)、
技術経営論(2)
生物実験計画法(2)、環境保全型農畜産実習(2)

＜共通教育基礎科目＞(18)

キャリア教育Ⅰ(1)、キャリア教育Ⅱ(1)、
全学農畜産実習(2)、農畜産科学概論Ⅰ～Ⅵ(6)、食の安全学
概論(2)
遺伝学(2)、細胞生物学(2)、統計学(2)

＜基盤教育科目＞(42)

共通教育科
目から24単
位履修

履修モデルの例(植物生産科学ユニット:国際)

＜展開科目＞(16)

土壌環境科学(2)、植物病虫害防除学(2)、植物ゲノム育種学(2)、
植物生産実習Ⅰ、Ⅱ(4)
卒業研究ゼミナールⅠ～Ⅳ(4)
卒業研究(2)

＜共通教育発展科目＞(24)

食用作物学(2)、植物生産土壌学(2)、植物生産学(2)、園芸
作物学(2)、草地学(2)、植物育種学(2)、植物病理学(2)、サ
ステナブル農畜産科学(2)、植物生理学(2)、環境保全農学(2)、
生物実験計画法(2)、環境保全型農畜産実習(2)

共通教育科
目から6単
位履修

＜共通教育基礎科目＞(18)

キャリア教育Ⅰ(1)、キャリア教育Ⅱ(1)、
全学農畜産実習(2)、農畜産科学概論Ⅰ～Ⅵ(6)、食の安全学
概論(2)
遺伝学(2)、細胞生物学(2)、統計学(2)

＜共通教育国際教育科目＞(18)

＜基盤教育科目＞(42)＋英語(2)

シラバスの作成に当たって

- 知識を身につけるだけではなく、学士力を身につけることを踏まえた授業方法を考慮し、授業の中でどのような学士力を身につけるのかを明示する。

<学士力とは>

- ① 知識・理解(教養、専門)
 - ② 汎用的技能(コミュニケーションスキル、数量的スキル、問題解決能力等)
 - ③ 態度・志向性(自己管理能力、チームワーク、倫理観、社会的責任等)
 - ④ 総合的な学習経験と創造的思考力
- 応用科目の場合、教育内容が主に、「農場段階」、「加工段階」、「消費段階」、「農場から食卓までの全段階」のどの段階に応用される科目なのかについて明示する。
 - 授業方法での新たな取組みについて考慮する

- アクティブラーニング
- 課題解決型授業(Problem based learning)
- 双方向授業
- 自学自習を促す授業方法

卒業研究の指導

・ <卒業研究の指導教員>

卒業研究の指導は、学生が修得するユニットと関係する部門分野の教員とする。畜産衛生学研究部門の教員は教員の専門分野から判断して部門分野を兼務する。

・ <卒業研究のグループ指導>

卒業研究を行うに当たって、部門分野の教員で卒業研究指導教員グループ(2名以上)をあらかじめ構成する。グループ内で学生の卒業研究指導教員を決めるが、指導はグループで行う。

・ <卒業研究の協力指導教員>

学生の卒業研究の内容がユニットのポリシーに沿う範囲で、部門分野外の教員の指導を受けることができる。協力指導教員の依頼の決定は指導教員とユニット長が責任をもって行う。

・ <3・4年生の学生支援>

卒業研究の指導教員は、指導する学生の卒業研究のほか、学生の修学指導、就職・進学相談等の学生支援を行う。

卒業研究、卒業研究ゼミの対応

- 卒業研究の目的

- それまで学んできた専門知識や技術に基づき、卒業ゼミナールで培われた能力を具体的に発揮して卒業研究を取りまとめる。したがって、具体的な卒業研究をまとめるまでの過程において、その能力を発揮することを踏まえた卒業研究指導が求められる。

- 卒業研究ゼミナールの目的

卒業研究を履修するに当たって必要な能力をゼミナールにおいて向上させる。

- 課題発見能力
- 課題を解決する方法を見出す能力
- ディスカッション能力
- 成果を取りまとめる能力
- プレゼンテーション能力

卒業研究の新たな取り組み例

<プロジェクトゼミ>

目的

- 畜大型グローバル人材の仕上げ科目としての卒業研究並びに卒業研究ゼミナールを強化する
- 専門＋専門外の研究者とのコミュニケーション力(理解力、プレゼンテーション力)の強化(点から線へ)

実施法の例

- 後期 1回/月x3ヶ月(通常の研究室単位のゼミは3回/月)
- 研究室(専門分野)を越えたゼミ
- 共通の研究成果を目指したプロジェクトを立ち上げて、学生が卒論研究で携わる
- プロジェクトゼミの参加学生による研究の進捗と研究論文紹介



プロジェクトゼミの例

- 植物育種ラボ＋食品機能性ラボ → 機能性作物の開発研究
- 植物育種ラボ＋食品加工ラボ → パン適性の高い小麦の開発研究
- 土壌ラボ＋環境微生物ラボ＋植物育種ラボ → リン利用効率を高めた作物と栽培法の開発研究



キャリア教育

- 「キャリア」

「人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見出していく連なりや積み重ね」

- 「キャリア教育」の定義

「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」(中教審)

- 平成23年大学設置基準改正

「社会的及び職業的自立を図るために必要な能力」を培うための体制と実践」(キャリア・ガイダンス)を義務化

- キャリア教育科目の設定

- 入学時の修学指導におけるキャリア教育

- 「キャリア教育Ⅰ」

- キャリア情報の提供、自己分析、キャリアプランを構想する。
- キャリアプランに基づいた修学プランを考える。

- 「キャリア教育Ⅱ」

- キャリア情報の提供、高度専門教育とキャリアについて考える。
- キャリアプランの再構築と具体的なキャリアプランに対する具体的な対応を考える。

国際教育プログラムの履修

- 国際教育プログラムの科目

- 共通教育国際教育科目

- 日本と世界の食文化
- 国際ボランティア論
- 国際農業開発論
- 国際比較農畜産論
- 国際開発経済学
- 国際協力ディベート論
- Advanced seminar
- ○海外フィールドワーク
- ○海外実習

- 語学

- 英語10単位以上

- English Communication, Advanced English Topics, Technical Writingは必修

- 国際教育プログラムを運営する教員組織を設置。

- 国際教育プログラムの責任を担う国際教育プログラム主任を配置する。

- 国際教育プログラムの科目はどのユニットからも履修が可能。ただし、○印のついた5科目の履修については、○印のつかない共通基礎科目を履修することが条件。

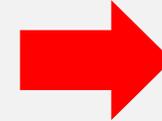
- 国際教育プログラムの必要科目を履修した学生には国際教育プログラムのディプロマを授与する。

学生の教育支援

- 1年次: クラス担任・就職支援室・教育支援室
 - 「全学農畜産実習」
 - 「キャリア教育Ⅰ」
 - 2年次: ユニット担任・ユニット・就職支援室・教育支援室
 - 前期: ユニット仮分属
 - 後期: ユニット本分属
 - 「キャリア教育Ⅱ」
 - 3年次前期
 - ユニット担任・ユニット・就職支援室
 - 3年次後期以降
 - 卒業研究指導教員(グループ)・ユニット・就職支援室
-
- 修学ポートフォリオ(カルテ)の作成
 - 学生の担当教員が学年によって異なることから、学生の支援の継続性を図るために学生個人ごとのポートフォリオを作成し、担当する教員に引き継ぐ。ただし、学生の情報は厳格に管理することが求められる。

授業評価について

- 授業評価の改善への要望
 - 授業評価実施科目の拡大
 - 授業評価の意義の周知徹底
 - 学部における実施科目の拡大
 - 大学院における実施
 - 実施時期の早期化



このFDで意見交換



- 授業評価の見直しを検討
 - 原則として全科目の授業評価の実施を検討
 - 授業評価項目の見直しを検討
 - 授業評価実施時期の検討

- 授業評価制度の今後の検討について
 - 教育支援室において検討